

「七ツで。」

「阿呆、七ツで子供を産むか。」

「違ふく、お母んが産みます。」

「お母ん何歳じや。」

「六十三で。」

「六十三で子供を産むか。」

「こら、あかんは。」

「それ見いな、あけへんと云ふてるのに。」

「ハイ、何方も御殿様を拜みに御座つたか、疎忽の無い様になされや。」

「旦那さん、御苦勞さんでおます。」

「オイ、あの旦那何處の旦那や音無しい宜いお方やなア。」

「あられの町内のお年寄や、あのお方が此の町内の御年寄になりはつてから此の町内に貧乏人が減つたと云ふ位や。」

「宜いお方やなア、ひたいに疵のあるのはどないしはつたんや。」

「あらこうや、彼の方は年の割に氣の若いお方で向ふへ田舎から孫の守子が來て居るのや、それにチ

ヤカついて枕でコツンとたゝかれたんやと、飯たきの平助に聞いたんやが、旦那はどないしはりましてんと聞くと、高い處から物を取る時は氣を付けなされや、此の間棚から道具箱を降ろさうと思ふて金槌が當つて疵が付いたと云ひはるのや。」

「アハ、さうか一べん聞いたろ。」

「オイ、シヨウム無い事云ひなや。」

「ハイ、何方もお殿様を拜みに御座つたのか、粗忽の無い様に仕なされや。」

「ヘエ、あんたも粗忽の無い様になされや。」

「オイ、そんな事を云ひないなア。」

「エ、旦那さんあんたのひたいに疵が付いてますがどないしはつたんだす。」

「ハイ、棚から道具箱を降ろさうと思ふてなア。」

「ヘイ、道具箱の女中を。」

「オイ、そんな無茶を云ひないなア。」

群衆がわい／＼云ふて居りますと程なく御通行となります。八呎鳥と申しまして保侶の着衣を着ました者が四人づゝ二組八人、足音をバタ／＼／＼、これは何故足音をさせますかと云ふと、もう御通行になるから靜にせよと云ふ先觸れで御座います。後へ續きますのがお先拂ひ、十人々々二十人宛、下